

新刊紹介

石川良子, 林恭子, 斎藤環 著
『「ひきこもり」の30年を振り返る』(岩波ブックレットNo.1081)
岩波書店, 2023年

鈴木 貴士*

本書において、ひきこもりは基本的にカギ括弧付の「ひきこもり」として表記されている。カギ括弧には「いわゆるひきこもり」や「ひきこもりなるもの」といったニュアンスが込められている。これは、著者の一人である石川の「ひきこもり」に対する「従来の捉え方や先入観を一旦保留し」(p.4) たいという理由による。

本書は、2022年12月に開催されたシンポジウム『「ひきこもり」の20年を振り返る—当事者・治療者・研究者の対話を通して—』の内容に加筆の上、書籍化されたものである。著者に名を連ねている石川良子は社会学・ライフストーリー研究の研究者、林恭子は「ひきこもり」の当事者、斎藤環は精神科医である。3名の「ひきこもり」に対する見方、とらえ方は必ずしも一致していない、というよりも対立する部分もみられる。

見方、とらえ方が一致していない部分について一点みていこう。「ひきこもり」の定義について、最も普及しているのは著者の一人である斎藤の「六カ月以上、自宅にひきこもって社会参加をしない状態が持続しており、ほかの精神障害がその第一の原因とは考えにくいもの」(p.28) というものである。一方、冒頭でみたように石川は、斎藤が定義したような「ひきこもり」に関する従来のとらえ方と異なる見方をしている。石川は『「ひきこもり」は実存的な問題である』(p.28) ということを強調しており、「社会参加ではなくて、生きることを巡る葛藤に焦点を当てたい」(p.28) と述べている。

斎藤は精神科医であり、「精神疾患の診断では患者の内面を捨象し、誰が診断しても同じ診断結果に至る」(p.34) といった精神医療の発想に軸足がある。一方の石川は社会学・ライフストーリー研究の研究者であり、前述のように斎藤とは考えを異にしている。

紙面の都合から石川と斎藤の見方、とらえ方の違いを取り上げたが、当事者である林の見解についても両者とは完全に一致していない。見解の不一致がありつつも、本書からは、石川・林・斎藤の3名がざっくばらんに語り合っている様子、そして、根本的には同じ方向を向いている様子が伝わってくる。

本書の内容をみていく。第1章『「ひきこもり」の30年を振り返る』では、3名の異なる視点から「ひきこもり」の歴史が示される。

1節『「ひきこもり」史を振り返る』では、当事者として「ひきこもり」に35年以上関わり続けてきた林が「ひきこもり」史の概観を示している。一部を紹介すると、「ひきこもり」誕生以前として1980年代の不登校から紹介が始まる。その後、1990年代には「ひきこもり」という言葉が報道や書籍刊行等を通じて広まっていく。2000年代には重大事件が「ひきこもり」と結び付けられることで「ひきこもり」イメージの変遷が起こる。また、就労支援の動きが広がり、厚労省において「若者自立塾」事業が行われることとなる(その後廃止)。2010年代以降は、当事者の動きの再活発化、厚生労働省が「ひきこもり支援」のプラット

* 国立社会保障・人口問題研究所 社会保障基礎理論研究部

フォームづくりを始めるなど、新たな動きもみられる。

また、本書巻末には「不登校・『ひきこもり』の年表」によって年表、出来事や関連書籍がまとめられており、史料価値が高い。

2節『『ひきこもり』の問題設定を捉えなおす』は、社会学の研究者である石川による内容である。「ひきこもり」がどのようにほかの社会問題と関連づけられてきたのか、林とは異なる視点で振り返った後、改めて「ひきこもり」の問題設定を見直すことで、石川が重視する「実存」の問題に切り込んでいる。

3節「精神医療からみた『ひきこもり』史」では、精神科医の斎藤の立場からみた内容となっている。斎藤の「ひきこもり」の定義の背景にある精神医療の立場については本稿冒頭で述べた通りである。本節では「外見的・普遍的に基準を決めて診断できるとする」(p.39)「普遍症候群」と「あるひとりの個人に一回きりしか現れない症状がたくさんあると」(p.39)する「個人症候群」に関する精神医学の話が紹介される。斎藤の「ひきこもり」の定義は「普遍症候群」的な発想から生まれているが、「個人症候群」との「ダブルスタンダード」を巡る斎藤の葛藤も語られている。

第1章に続く第2章『『ひきこもり』の捉えなおしと未来』では、シンポジウムの参加者からの質問を題材に3名が議論を繰り広げる章となっている。「ひきこもり」という看板が社会的な偏見やステイグマによって支援の邪魔になってしまう場合があるという議論と、一方で「ひきこもり」という言葉で救われた当事者もいるという議論が語られる中で、最終的には『『ひきこもり』という看板を見直したほうがいい』(p.82)という「ひきこもり」の未来に向けた話で締めくくられている。

このように、本書は立場の異なる3名の「ひきこもり」に対する見方・議論を通じて「ひきこもり」の歴史や理解を深められる良書である。

一方、「ひきこもり」に興味関心のある人々を対象にしたシンポジウムを元に本書が書かれたからか、コンパクトさ(約90p)と裏腹に、3名の議論を理解するには「ひきこもり」に関する前提知識を要する。例えば、本稿前半で述べたような「ひきこもり」の見方・とらえ方に対する石川・斎藤の見解の違いを理解するには本書だけでは難しいだろう。3名の議論を深く理解したい場合には、石川・林・斎藤の各著作(本稿末に3名の主な著作を示した)を読むとよいだろう。

本書で説明・議論された内容は「ひきこもり」に関して網羅された訳ではなく、あくまでも石川・林・斎藤らの議論であると考えべきである。特に、「ひきこもり」の家族・支援者等にとっては異なる考え方があるかもしれない。

しかし、「ひきこもり」が社会問題化して約30年が経つ中で、歴史も含めて取りまとめた本書の価値は高い。異なる立場の3名が議論の末にたどり着いたのは、『『ひきこもり』は『治療されるべき疾患』でも『解決されるべき問題』でもなく、目指すべきは『ひきこもることが問題視されない社会』であるということ』(p.88)という視点である。本書の目指すべきところが「ひきこもることが問題視されない社会」だとするのであれば、「ひきこもり」関係者ではなく、むしろ「ひきこもり」関係者ではない人にこそ本書は読まれるべきだろう。

参考文献

- 石川良子『『ひきこもり』から考える—〈聴く〉から始める支援論』(ちくま新書), 2021。
林 恭子『ひきこもりの真実—就労より自立より大切なこと』(ちくま新書), 2021。
斎藤 環『改訂版 社会的ひきこもり』(PHP新書), 2020。

(すずき・たかし)